
逃走

STR

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走

【Nコード】

N3203M

【作者名】

STR

【あらすじ】

一人の男が集団に追われていた。

彼はなぜ追われるのか、逃げ切ることができるのか。

＊逃走＊

俺は今、必死に逃げている。

後ろからはやつ等が追ってくる。

俺はすでにふらふらだというのにやつ等にはまだ余裕があるようだった。

くそつ、こんなことなら普段から運動をしとけばよかった。

上からは太陽が俺の体をじりじりと焼き、足元の草は俺の足にからむ。

コンディションは最悪だ。

しかし、やつ等にはそんなもの関係ないようで俺との距離を詰めてくる。

このままでは捕まってしまう。

やつ等はもう、すぐ後ろに来ていた。俺もここまでか……。

すぐ隣で音がした。

一緒に走ってきた田沼が転んだ音だった。

やつ等が、その隙を見逃すわけもない。

田沼はやつらに捕まってしまった。俺は悔しい思いでいっぱいになった。

だが、皮肉にもそのおかげで俺はやつ等から逃げれたのだった。

近くの木の裏へと身を潜める。

疲労と緊張で心臓は鼓動が聞こえるほどに大きく鳴っていた。息も切れ、動くことさえまもなくなくなってしまった。

今は、田沼のおかげでやつ等の追走を振り切れたが次は捕まってしまう。どうしたら良いのだろう。

必死に考えるが解決策が見つからない。

近くで足音がした。緊張が高まる。俺は動くわけにも行かずその

場で息を潜めることにした。

心臓の鼓動がさつきよりも大きく鳴っている。

足音はしだいに遠くなっていく。

助かった。

一息つきたいところだったが、また足音が聞こえてきた。不意をつかれ、慌ててしまった。

がさつ。

音を出してしまった。

もうだめだ。

しかし、近づいてきたのはやつ等ではなかった。

「おい、大丈夫か」

話しかけてきたのは山田だった。俺があまりにもぐったりしているから心配して声をかけてくれたのだろう。

「ここら辺りはほとんど敵だらけだ。移動するにもやつ等は俺達より足が速い」

山田の言うとおり周りを見れば仲間の姿はなく、やつらに取り囲まれたと言ってもよかった。

「だが、ひとつだけ生き延びる方法がある」

俺にはその方法が分かる。今度は俺が仲間を助ける番だ。

「俺が行く」

台詞を山田に取られてしまった。

山田は俺を木の陰へと押し込みやつ等の元へと走り去ってしまった。

俺はまた味方を犠牲にして生き延びたのだ。

ここにはもう、やつ等はいない。体力も回復した。

今度は俺が犠牲になる番だ。

山田たちが捕まっている牢屋に向かって全速力で走る。

牢屋となつていいる場所まで二十数メートルだ。

幸いやつ等は俺には気づいていないようだった。

なんとかしてタッチできれば。

「おい、助けに来ているぞ」

やつ等の内の一人が叫んだ。

目の前に数人が立ちふさがる。

俺は大きく左に曲がり追走を逃れようとした。

目の前には牢屋があるあとはタッチするだけだ。

しかし、あと数メートルという所で警察に捕まってしまった。

「終了。警察の勝利だ」

こうして俺たちのレクリエーションは終わった。

「たまには、ドロケイもいいなあ」

俺たちは三人で話しながら家路についた。

終わり

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

補足として「ドロケイ」は地方によって「ケイドロ」など呼び名が変わりますが、作者の地方では「ドロケイ」と呼ぶのでこうしています。

感想をいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3203m/>

逃走

2010年10月11日04時40分発行